1月9日　朝日新聞　朝刊（北海道版）

滑膜肉腫に幹細胞

進行防ぐ治療に期待

北大発見

若い人の腕や足の関節に発症しやすい悪性腫瘍「滑膜肉腫」に、腫瘍をできやすくする幹細胞があることを、北海道大の田中伸哉教授（腫瘍病理学）らの研究グループが発見した。英国のがん研究専門誌に昨年12月に掲載された。がんの進行を防ぐ治療などへの発展が期待できるという。

滑膜肉腫は、胃がんや肺がんなどの「がん」に比べて発症頻度が低い希少がんの一つ。希少がんセンターによると、2010年までの5年間で国内では292人患者が報告されている。

研究グループは、滑膜肉腫の細胞を培養し、幹細胞が存在することを発見。その遺伝子を調べた結果、幹細胞にある突起部分に「CXCR4」というたんぱく質があった。たんぱく質がある細胞と、ない細胞をマウスに移植すると、たんぱく質がある方が腫瘍を作り出す能力が25倍も高かった。この病気の患者の生存期間を比較すると、たんぱく質がある患者は約4年で半数が亡くなり、ない患者は3割が亡くなった。

田中教授は「このたんぱく質の働きを抑えれば、がんの進行や再発、転移を防げるはず。働きを抑える薬は悪性リンパ腫の治療薬として開発されており、これを応用し、数年以内には臨床試験をしたい」と話す。

（森本未紀）